東雲小学校

『豊かな人間性を育む国語の研究』

～「読むこと」の指導と「読書活動」の活性化を通して～

Ⅰ、主題設定の理由

本校は昨年度から、国語科を中心に研究を進めてきている。昨年度はあらゆる学習の基礎となる「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」の領域を研究対象としてきた。昨年度の意識調査では、国語の学習が「好き」な児童が多く、授業に満足している様子が伺えた。しかし、漢字の習得や読書への興味は比較的高いものの、難解な文章を嫌ったり感想を出し合ったりすることを嫌がる傾向がある。そこで、日常の「読書活動」を活性化し、「読むこと」の指導法を工夫する研究に取り組んでいきたいと考えた。

Ⅱ、研究の具体的内容と方法

（1）「読む力」の基礎基本についての理論研究

ア）「読むこと」の目標や「読解力」についての学習会をする。

イ）「絵本くらぶ」代表塚田さんの講演会を聴く。

ウ）「「読むこと」の年間時数配当表を作成する。

エ）各学年の評価規準表を作成する。

（2）児童の実態把握

ア）「読むこと」に関する意識調査を全校で実施し、考察する。

イ）評価規準表に基づく個人カルテを作成する。

（3）読書の活性化を図る具体的方法

ア）学年ごとに「おすすめの本」を紹介し掲示する。

イ）長期休業に「読書の記録」で読書の習慣をつける。

ウ）「東雲祭」で日常の音読や群読の発表を出し合う。

（4）授業検証

ア）ひとり一実践を提供し、仮説を検証する。

（5）読書活動についての取り組み

ア）ブックトーク、読み聞かせ、アニマシオン、読書集会など

Ⅲ、研究の成果と課題

1、成果

（1）・講演会で子どもと本の出会いについて考え、年間 16 回の「お話し会」を実施し、子どもたちが本を読む意欲付けにつながった。

・「読むこと」の年間時数を把握して、低学年での読みの重要性を改めて、確認した。

・2学年ごとのまとまりになっている評価規準を学年ごとに表したことで、より細かい視点で子どもひとり一人を評価することができた。

（2）・1学期の調査で学年の特徴や問題点を把握し、指導にいかすことができた。3 学期に同じ調査を行い比較することで、一年間の取り組みで児童の意識がどのように変容したかを読み取ることができた。

・評価規準に照らした個人カルテを作成したことで、学級の実態を詳しく読み取り、個別指導にいかすことができた。

（3）・『読書の道』の掲示コーナーを子どもたちがよく目にし、読書に対する意欲が高まった。また、長期休業中の『読書の記録』では、読書の習慣化を図り、保護者の啓蒙に役立った。『東雲祭』での群読の取り組みは、日頃の学習の成果を発表する場として効果的だった。

（4）・4回の研究授業では、評価規準表を基にした学習カードが工夫され子どもたちの意欲づけに役立った。また、1授業1目標1評価の授業実践では、児童と教師が目標を共有することで、ねらいのぶれない授業となった。

・児童の実態を把握し、評価規準Cとされる児童について、ティーム・ティーチングや具体的な声掛けや支援などをさぐることができた。

（5）・読書の活性化を図る様々な働きかけがなされ、子どもたちが図書室に足を運ぶようになり、全体の読書量が増加した。

2、課題

・ 国語科の3領域は相関しあっているので、昨年度の領域の振り返りをする時間をとったほうがよかった。

・ 評価規準表をより簡単に、効果的に活用する方法を考えていきたい。

（研究主任　雨宮由縁）